

研究タイプによる質問紙調査の質問項目作成について

田名場 忍 弘前大学教育学部附属教育実践総合センター

1 はじめに

平成18年度第3回研究員会にあたり、研究員会担当野呂先生から、皆さんの教育実践研究にお役に立てる資料を作成するようにとのお話をいただきました。私の専門は心理学です。心理学では人間の意識や行動に関する多様な課題を研究していますが、研究方法も実験・質問紙調査・観察・面接、さらには作文などの既存資料を用いた研究や仮想現実での行動の研究など実に様々なものがあり、工夫されてきています。なぜ研究ごとに様々な方法がとられているのでしょうか。私は、調べたい内容に適したやり方を各研究が追求するうちに、結果としてそうなったと理解しています。皆さんの研究も、心理学同様、実に多様な研究内容に焦点を当てられておられます。必然的に採用される研究方法も各々の研究に適したものになると思います。

ところで、質問紙調査というひとつの方法を取り上げましても、予想される結果を確認したい場合もあれば、結果に予想がつかない場合もあります。それぞれの場合で作成される質問項目は異なりますし、結果の扱い方にも違いがあります。今回は、このうちの質問項目に着目し、その作成や結果処理の仕方を取り上げながら、研究内容をいかに適切に研究方法に反映させる工夫を行ってきたのかをご紹介します。この資料が、皆さんの研究方法を練り上げる際のアイデアを生み出す契機となりましたら幸いです。

2 質問紙調査とは

質問紙調査は、各個人の意見、態度、価値、感情、性格、行動傾向などといったさまざまなことから（多くの場合、構成概念）を、質問文とそれに対する回答という言語活動から測定する方法といえます。広い意味では様々な心理検査をも含むものとして用いられませんが、狭い意味では人間の意識・行動の調査のことを指しています。質問紙調査は、言語を介して情報を得るという方法になりますので、調査対象は人間のみに限られるという点が特徴です。

質問紙調査の長所は、実験や観察が難しいいじめや暴力行動などの問題についても、仮想の状況を設定し、回想してもらうなどというやり方で扱うことができる点にあります。つまり、比較的広範な問題を扱うことができる点がメリットになります。また、一律な質問項目の回答を求めるものですから、面接や観察に比較して客観性の高い結果を得やすいという点も指摘できます。さらに、同時に多くの人に質問紙調査を行うことも可能で、短時間に多くのデータを収集することができます。このようにデータの収集効率が良いことから、大規模な統計分析が可能となり、個人間や集団間の比較がしやすくなります。そして、回答は教室や自宅などさまざまな場所で行うことができますし、匿名で行うことも可能ですので、回答者のコストが比較的少なく、協力が得られやすい点も長所のひとつといえます。

一方、短所としては、回答者の言語的理解力や言語的表出能力に依存するという点があります。こうした能力の十分でない乳幼児や障害を抱えた方への質問紙調査は不可能な場合がありますし、たとえ回答が得られたとしても回答者の真意を適切に表すものかどうかには注意が必要なこともあります。質問紙調査では一般的にプライバシーに関わるような個人的情報が得られにくいことが多く、また回答が偽りであったとしてもそれを見分けることは困難です。

質問紙調査を実施される際には、こうした長所や短所を踏まえた上で質問項目を作成したり、回答をいただく方を決めたりしていく必要があります。

3 質問紙調査におけるさまざまな質問項目について

質問項目を作成する前に、当然のことではありますが、何を調べたいのかを明確にすることは重要です。質問項目を作成する際には、それぞれの質問が何を調べるためになされるのかに常に配慮する必要があります。また、各質問項目が事実を尋ねるものなのか、行動を尋ねるものなのか、あるいは意識について尋ねるものなのかにも留意しながら作成することも大切です。

ここでは、典型的な質問項目をいくつか取り上げ、その具体例を示します。質問項目の例として、麺類の嗜好をテーマにした質問項目を作成しましたので、回答をされながら、質問項目の特徴について見ていただけたらと思います。

① 自由回答法

回答を自由に記述してもらう方法で、回答にあたっての質問を提示し、回答者に文章で回答してもらう方法です。多様な回答が見込まれる場合や回答の予測が難しい場合に用います。

この方法は、回答者の言語的表出能力や回答意欲に強く依存します。できる限り、回答しやすい質問を作成することが大切です。また、自由回答法に限らず、回答が難しいと思われる質問項目（プライバシーに関連する質問項目など）は、質問紙後半に位置づけることで無回答などを避ける可能性が向上します。さらに、自由回答法の結果整理には相当な時間を要することが多いので、あらかじめその点に留意した研究計画を立てておくことも大切です。

例)【質問】あなたはどのような麺類がお好きですか。その理由も含め、自由にお書きください。
()

② 多肢選択法

一つの質問項目に対して複数の選択肢を用意し、回答はその選択肢の中から選んでもらう方法です。主要な回答がある程度明確な場合に用います。回答は選択肢に○印をつけてもらう方法が一般的です。回答の分析は、主に選択肢ごとの頻度を比較することでなされます。他の質問項目の結果との関連についての分析にも用いられることが少なくありません。

多肢選択法は、回答への負担が比較的少ない方法です。その分、作成に当たっては、選択肢の選定等に労力と時間がかかります。選択肢には回答の主要なものを配置する必要がありますが、もし選択肢以外の回答も見込まれる場合は、下の例のように「その他()」といった選択肢も加え、括弧内に自由に記述してもらう工夫もあります。

以下には、多肢選択法について3種類あげましたが、限定回答法は結果分析が難しいので、できるならば避けた方が無難です。

(a) 単一回答法

例)【質問】次の麺類の中で、あなたが一番好きなものはどれですか。

① ラーメン ② うどん ③ 日本そば ④ その他()

(b) 複数回答法

例)【質問】次の麺類の中で、あなたが好きなものにいくつでも○をつけてください。

① ラーメン ② うどん ③ 日本そば ④ その他()

(c) 限定回答法

例)【質問】次の麺類の中で、あなたが好きなものを2つ選び、○をつけてください。

- ① ラーメン ② うどん ③ 日本そば ④ その他 ()

③ 順位法 (品等法)

複数の項目に順位をつけてもらう方法です。好悪や行動選択等順位を比較したい場合に用います。

先の多肢選択法に順位という情報量が加わっているのが特徴です。例えば、単一回答法ですと回答以外の選択肢の嗜好についてはわからないのですが、順位法では作成した項目全体の嗜好順位が明らかになります。ただし、「その他 ()」といった項目を設けることができない点や結果処理(統計分析)に制限がある点が難点です。

例)【質問】次の麺類について、あなたが好きな順に1~3まで順番をつけてください。

- ① ラーメン ()
 ② うどん ()
 ③ 日本そば ()

④ 評定法

程度や頻度などのいくつかの段階(5件法, 6件法, 7件法など)を設定し、その中からひとつを選択してもらう方法です。段階評定法などとも呼ばれます。ひとつひとつの項目についての詳細な情報が得られることが特徴で、質問紙調査で頻繁に用いられる方法です。項目ごとに、選択肢形式にすることも可能です(例えば、「① 非常に好き・② やや好き・③ どちらともいえない.....」など)。

先の順位法では嗜好の順位は明らかになりましたが、ひとつひとつの項目の嗜好程度までは明らかになってはいませんでした。例えば、うどんを1番と回答した場合でも、うどんが大好きな場合もあるでしょうし、麺類は一般に嫌いなのだけれど無理に順番をつけると嫌いという程度が小さいのはうどんという場合もあるでしょう。評定法では、順位に加えて、程度や頻度などの情報も得ることができます。また、結果の分析に多様な統計処理が可能となる点も特徴です。特に、項目間の関連パターンを全体的に検討する際(例えば、麺類の嗜好パターンが、和風嗜好と洋風嗜好に別れるかどうかなど)にさまざまな統計分析を適用することができます。

例)【質問】次の麺類について、あなたはどの程度好きですか。

それぞれひとつに○をつけてください。

	非 常 に 好 き	や や 好 き	ど い ち え ら な い も	あ ま り な い	好 ま し き で な い
① ラーメン	-----				
② うどん	-----				
③ 日本そば	-----				

ただし、評定法は多肢選択法や順位法に比較して、回答数が増える分、回答者に負担をかける方法です。評定段階を増やせば結果の分析において回答傾向を明らかにしやすくなるのですが、10件法以上になりますと回答にも時間がかかり、回答者の負担が増します。適切な項目数や評定段階数に配慮する必要があります。また、偶数評定段階にするのか、

奇数評定段階にするのかにも注意が必要です。あえて「どちらともいえない」という回答を除く場合に、偶数評定段階を選択します。さらに、評定段階にかかる表現用語にも配慮が必要です。例えば、「非常に」と「かなり」では程度がどう異なるのかにも気を配る必要があります(この点についての詳細は、参考文献をあげましたので、そちらを参照下さい)。

4 いくつかの研究タイプと質問項目について

研究で何かを調べようとするときに、少なくとも何を調べるのか(リサーチ・クエスションとも言います)を明らかにする必要があります。しかし、研究によっては質問項目への回答結果があらかじめ予想できる場合もあれば、そうでない場合もあります。また、明確な回答結果の予想はできないにせよ、ある程度の予想であれば可能な場合もあるでしょう。回答結果が予想できる場合でも、予想できるから研究の必要はないかといえ、そうではありません。予想する回答結果を確認することで、その結果に確信をもって教育実践などに応用できることの意義は大きいといえます。また、結果が予想していなかったものになったからといって、その研究は意義のないものともいえません。予想しなかった回答結果から、これまで気づかれていなかった問題を発見できることもあります。そうした新たな気づきが、これまでにない研究領域を切り開く契機になるのであれば、研究としての意義は大きいといえます。以下には、このような点にも関連して、質問紙調査を用いた研究のタイプを「探索的研究」と「仮説検証的研究」に大別し、それらの特徴と用いられる質問項目について概観します。

① 仮説検証的研究

あらかじめ予想される結果があり、そのことが本当かどうかを確認したい場合の研究タイプとして、仮説検証的研究を取り上げます。仮説(ここでは作業仮説という意味で、仮説を使います)は、理論から導き出されるもので、研究の内容を具体的に示すものです。例えば、粗暴傾向が暴力的環境と関係しているという理論がある場合に、「暴力的なテレビ番組を好んで見ている生徒は他者に対する攻撃的発言が多い」というものが仮説になります。仮説には、原因と結果に言及する場合がありますし、二つ以上の要因の関連を述べる場合もあります。また、ひとつの要因の出現頻度のみを扱う場合もあります。ここでは、上記の粗暴傾向と暴力的環境を例に、二つの要因の関連を検討する場合の質問項目の作成と分析例について紹介します。

「暴力的なテレビ番組を好んで見ている生徒は他者に対する攻撃的発言が多い」という仮説の場合、「暴力的なテレビ番組を好んで見ている」かどうかという要因と「他者に対する攻撃的発言が多い」かどうかという要因の二つの要因に分けることができます。質問項目を作成する際には、両者の要因をそれぞれ独立につくることが望ましいのです。例えば、「あなたは、〇〇というテレビ番組をかかさず見えていますか」などという質問項目と「あなたは、友達に腹が立ったとき、その友達に「死ね」と言ったことがありますか」などという質問項目です。場合によっては、各要因について複数の質問項目を作成するのが望ましいこともあります。また、質問項目は、評定法、多肢選択法によるものがよく用いられます。

ここでは、この二つの質問項目を例にして、多肢選択法(暴力的なテレビ番組を見ているか否かと「死ね」と言ったことがあるか否か)での回答結果の分析例を示します。例えば、次ページの図の結果が得られたとしましょう。①は暴力的なテレビ番組を見ているかどうかで、②は「死ね」と言ったことがあるかどうかを示しています。合計 100 人の生徒の回答結果が次ページの図のようになったとすると、暴力的なテレビ番組を見ている生徒の大半(55 人中 45 人)が「死ね」と言ったことがあると回答し、暴力的なテレビ番組を見ていない生徒の大半(45 人中 40 人)が「死ね」と言ったことはないと回答していることがわかります。すなわち、「暴力的なテレビ番組を好んで見ている生徒は他者に対する攻撃的発言が多い」という仮説が確認されたこととなります(実際の統計分析では「暴力的なテレビ番組を好んで見ているかどうかと他者に対する攻撃的発言の多さは関係がない」という帰無仮説と呼ばれるものを設定し、それを否定することで仮説の検討を行います)。

② 「死ね」発言		①	
		あり	なし
暴力 テレ ビ	見る	45	10
	見ない	5	40

図 暴力的番組視聴と粗暴発言の関連

② 探索的研究

仮説が設定できない場合、つまり結果が予想できない場合に、どのような結果になるのかを知りたいということがあります。このようなときは、あらかじめ何を調べたいのか(リサーチ・クエスチョン)を明確にした上で、結果から回答の特徴や傾向を探っていきます。この場合の研究タイプの典型として、探索的研究があります。新たに仮説を作りだすことを目的としている場合には、仮説生成的研究などとも呼ばれます。

探索的研究では、まったく回答結果が予想できない場合の質問項目として自由回答法が用いられます。また、ある程度の回答結果が予想できる場合には、自由回答法他、多肢選択法が用いられることもあります。ここでは「生徒はなぜ髪を染めるのか」というリサーチ・クエスチョンについて、「あなたが、髪を染めてみようと思うときは、どのようなときですか。自由にお答え下さい。」といった自由回答法を用いた場合の生徒の回答結果とその分析の例を示します。おそらく、さまざまな回答があろうと思います。それら一人ひとりの回答をカード(1回答1カードにすると便利です)などに書き出し、並べ替えを行いながら同種の回答カードをまとめ、そのグループの分類名を考えていきます。例えば、「心細くなったとき」「淋しくなったとき」などの回答に不安定な情緒という分類名を与えることができるかもしれません。また、「友達が染めているのを見たとき」「友達から染めればと言われたとき」などに友達の影響という分類名を与えるかもしれません。こうしたグループや分類名を何通りか作成しながら、適切なグルーピングについて検討していきます。その検討過程あるいは検討結果、さらには他の結果との関連を通して、回答の特徴や傾向を探っていきます。

5 まとめ

質問項目と一口にいいましても、さまざまな種類がありました。それは、研究が何をどのように明らかにしたいのかということにしたがって、適切な質問項目を注意深く選択することや新たな質問項目を作り出す努力が積み重ねられてきた結果ともいえるでしょう。教育実践研究を行う皆さんが、それぞれの研究に適切な方法を見つけられますことを願っております。

【参考文献】

鎌原雅彦ら編著 1998 心理学マニュアル質問紙法 北大路書房
続有恒ら編 1975 心理学研究法 9 質問紙調査 東京大学出版会